

TOPIX

- 近視抑制治療の実施割合は小児を診療するG P眼科医の57%であった。
- 近視抑制治療を行う患者の82%に低濃度アトロピン点眼が使用されており、オルソケラトロジーとの併用は限定的。
- 1年前と比較し、近視抑制治療の「患者数が増えている」「治療開始タイミングが早まってきている」と回答した医師が多い。
- 約9割の医師が「アトロピンの一部保険適応」について認知しており、回答者の半数以上がアトロピン処方にポジティブな影響があると回答した。
- アトロピン処方医の約半数は有効性を懸念しており、患者説明の難しさを感じている医師も散見される。IC時も、とくに有効性に留意し説明されていた。

調査背景

2024年に低濃度アトロピン製剤が国内初の「近視の進行抑制」での承認を受けて以降、一般への近視抑制治療の浸透が進んでおり、2026年6月には低濃度アトロピンの一部保険適応がなされた。本調査では、眼科医を対象に「小児への近視抑制治療の現状」と「低濃度アトロピン治療の一部保険適応を踏まえた医師の意識変化」について確認した。

調査概要

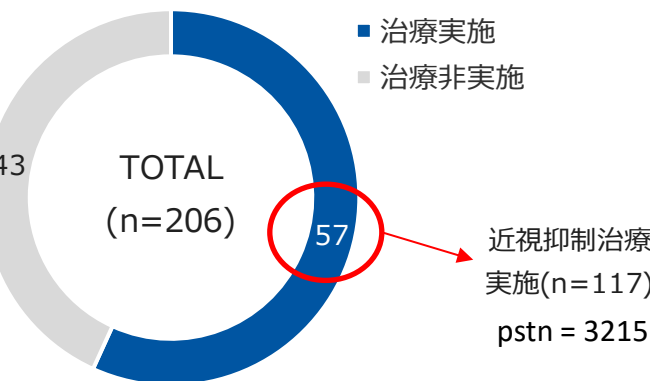
調査方法：インターネット調査	有効回答：206サンプル
調査地域：全国	調査期間：2026年6月23日～6月30日
調査対象：眼科医（19床以下）	調査主体：株式会社インテージヘルスケア
※15歳以下の小児患者を診療	調査パネル：プラメド医師会員

調査結果概要

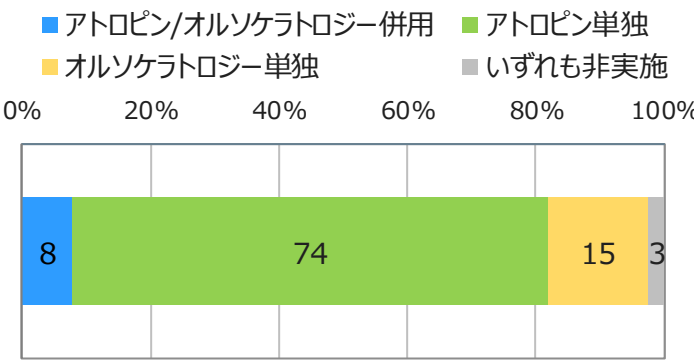
<近視抑制治療の現状 1>

- 小児を診療している眼科における、近視抑制治療の実施割合は57%であった。（図①）
- アトロピンとオルソケラトロジーの実施状況はアトロピン単独が74%と大部分を占めており、オルソケラトロジーの使用患者割合は23%程であった。（図②）

図①:近視抑制治療 実施の有無



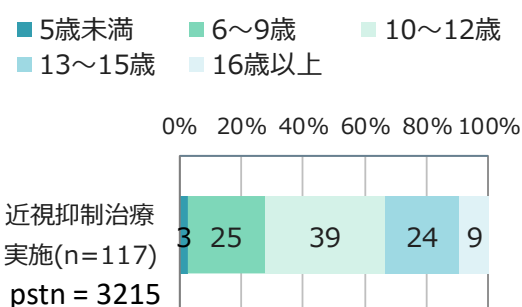
図②:低濃度アトロピンとオルソケラトロジーの使用状況別患者割合



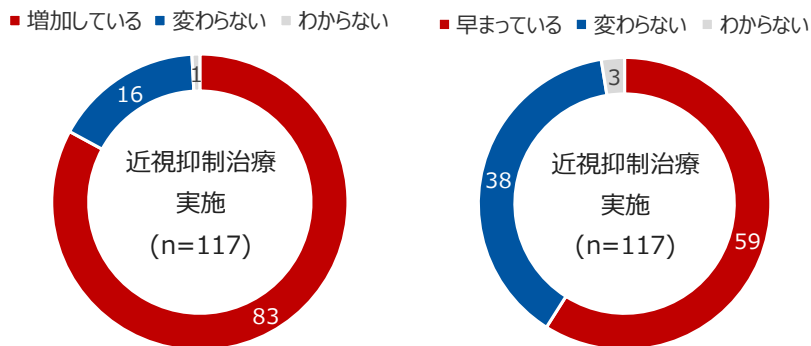
<近視抑制治療の現状 2>

- 患者年齢内訳は6～15歳が88%を占めており、特に10～12歳が39%と最も多い。(図③)
- 1年前と比較し、83%と大部分の医師が「患者数が増えている」と回答した。また、59%の医師が「治療開始タイミングが早まってきている」と回答した。(図④)
- 治療開始のきっかけは、「患者(親)からの希望」が約70%、「医師からの紹介」が約30%

図③:近視抑制治療 患者年齢内訳



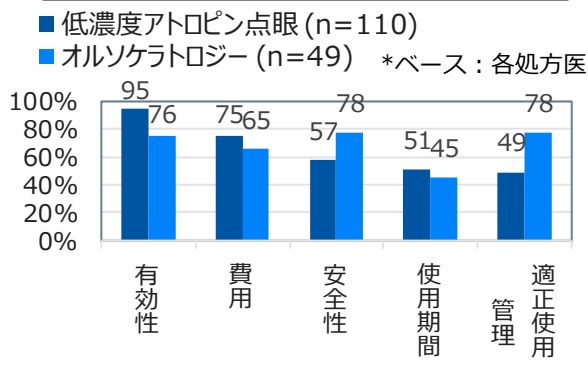
図④:1年前と比較「患者数/治療開始タイミング」の変化



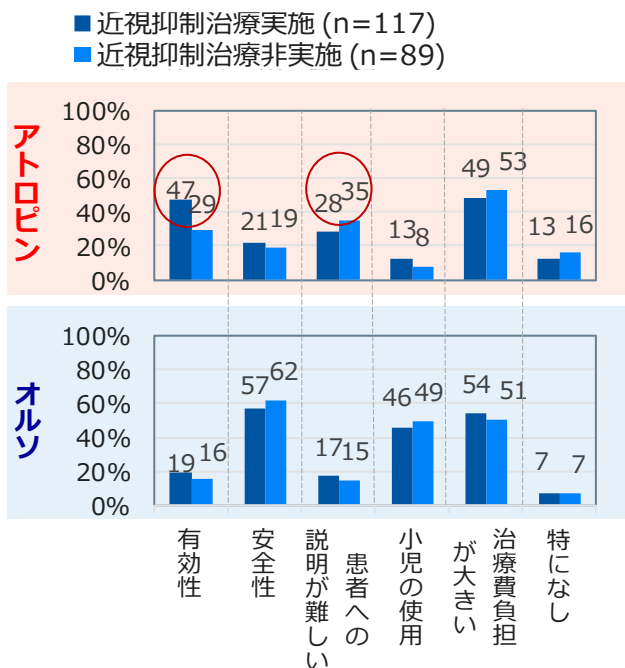
<近視抑制治療への考え>

- IC時に気を付けている事は、アトロピンは有効性、オルソケラトロジーは安全性と適正使用をあげる医師が多い。(図⑤)
- 懸念点は、「費用」は両治療共通で、それに加えてアトロピンは「有効性」「患者への説明が難しい」があがった。(図⑥)

図⑤:患者説明時に気を付けている事



図⑥:各治療の懸念点



<低濃度アトロピン点眼 一部保険適応の影響>

- 本調査回答医の88%が、『低濃度アトロピン点眼の一部保険適応』について認知していた。
- 一部保険適応をうけて、近視抑制治療実施医は57%が「処方を増やす」と回答しており、また現在は近視抑制治療を実施していない医師においても44%が「今後処方開始する」意向を示した。(図⑦)

図⑦:保険適応 アトロピン処方への影響

